

2008年7月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500 hPa 面高度場では、寒帯前線ジェットに沿った準定常ロスビー波の波束伝播に伴いリッジが発達したグリーンランド東部と東シベリアで明瞭な正偏差となった。一方、上旬と下旬にトラフの発達したアラスカ付近では負偏差となった。上旬には、南島島付近で活発だった対流活動の影響を受け、日本の南の太平洋高気圧の勢力は平年よりも弱かった。北半球のジェット気流は、リッジの発達した東シベリアで南北に分流した。東アジア上の亜熱帯ジェットは平年よりも弱く、日本付近の梅雨前線の活動は不活発だった。対流圏下層の気温は、リッジの発達したグリーンランド周辺とオホーツク海周辺で高かった。移動性擾乱の活動は北西太平洋で不活発、ヨーロッパで活発だった。

熱帯の対流活動は、インド洋西部で非常に活発、東部太平洋、大西洋でも活発だった。インド洋西部で対流活動活発な状態は6月後半以降持続している。一方、フィリピンの東方海上から中部太平洋にかけては不活発だった。なお、北西太平洋の20°N帯における対流活動は、対流圏上層における寒冷低気圧の南下に対応して活発となった。赤道季節内振動(MJO)の活発な位相の東進は、7月上旬には不明瞭だったが、中旬から下旬にかけてはインド洋からインドネシア付近にかけて明瞭に見られた。これと同期して、アジアモンスーン域における対流活動活発域の北進が明瞭に

見られた。対流圏下層の循環を見ると、対流活動が不活発だったことに対応して、フィリピン付近から中部太平洋にかけて高気圧性循環偏差が明瞭となった。

南方振動指数(SOI)は+0.2となった。

世界の天候

2008年7月の世界の月平均地上気温年差は+0.28°Cで、1891年の統計開始以来、7番目に高い値となった。7月の世界の平均地上気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は0.62°C/100年である。

○モンゴル周辺は、暖かい南風が入ることが多く異常高温となった。

○アルジェリア北部からサウジアラビア西南部周辺では、上空の高気圧の影響で異常高温となった。

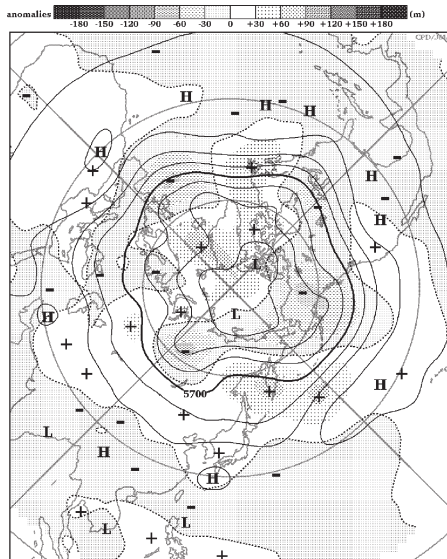
○ヨーロッパ北部からグリーンランド周辺、カナダ北部では、異常高温となった。

○アルゼンチン北部周辺では、暖かい北よりの風が入ることが多く異常高温となった。

(気象庁地球環境・海洋部気候情報課)

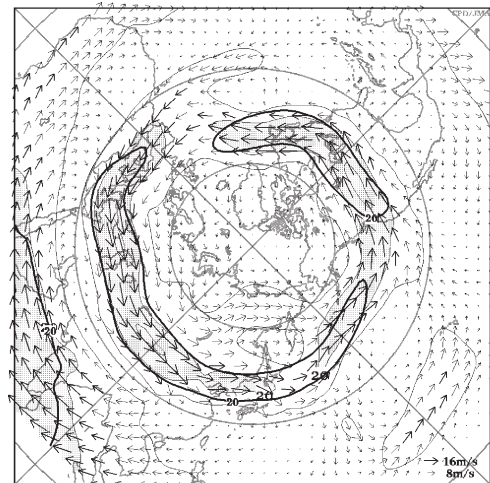
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



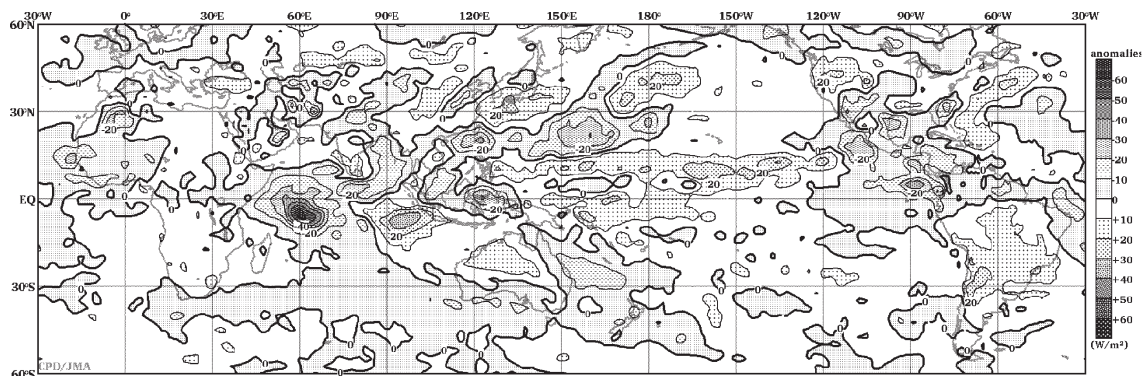
2008年7月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差

等値線間隔は60 m. 陰影は平年偏差. 平年値は1979~2004年のデータから作成。

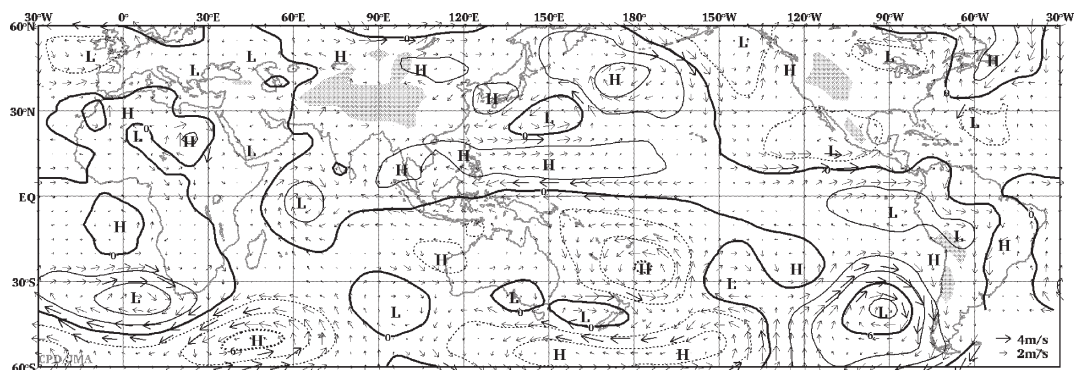


2008年7月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル

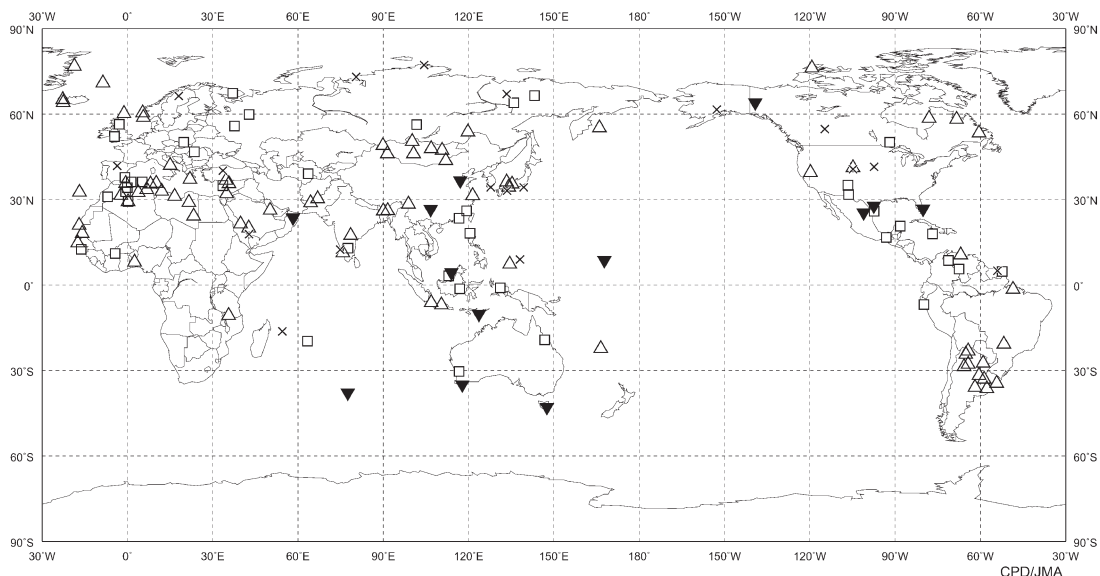
等値線間隔は10 m/s. 陰影部は20 m/s 以上. 太実線で囲まれた領域は平年の20 m/s 以上の領域を示す. 平年値は1979~2004年のデータから作成。



2008年7月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2008年7月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2008年7月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。